

聖霊降臨日 ヨハネ20章19―23節

〔直訳〕

19 さて夕方になって 週の初めのその日、
そして いくつもの戸が 閉じられて、
そこには いた 弟子たちが ユダヤ人への恐れのために、
来た イエスが、 そして 彼は立った まん中に、

そして 彼は言う 彼らに、
「平和が あなたがたに」。
20 そして これを 言って、
彼は示した 両手とわき腹を 彼らに。

そこで 喜んだ 弟子たちは 見て 主を。

21 そこで 言った 彼らに 「イエスは」 再び、
「平和が あなたがたに」。
ように 遣わした 私を 父が、
私も 送る あなたがたを」。

22 そして これを 言って、 彼は息を吹きかけた。
そして 彼は言う 彼らに、
「受けなさい 聖霊を。」

23 ある人たちの あなたがたが手放せば 罪を、
それらは手放される 彼らに関して。
ある人たちの あなたがたが保持すれば、
それらは保持されている。

〔新共同訳〕

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

①文脈

① ヨハネ 20章は大きく二つの段落（1―18節、19―29節）に分けられる。どちらの段落でも、まず複数の弟子に関係する出来事が語られ、その後、ある個人に関わる出来事が語られる。

1―18節

⑦ 1―10節 ペトロと「もう一人の弟子」が、墓が空であったことを確認する。

⑧ 11―18節 イエスがマグダラのマリアに顕現

19―29節

⑦ 19―23節 イエスが弟子たちに顕現

⑧ 24―29節 イエスがトマスに顕現

しかも、すべての出来事が「週の初めの日（日曜日）」に起こっている。イエスの復活は集団と個人とを変える出来事であり、日曜日（祭儀）と関係する出来事である。

② ヨハネ 20章 19―23節では、復活したイエスがマグダラのマリアに現れたその日の夕方、弟子たちにも現れ、息を吹きかけて、使命と権能を彼らに授ける。

② ヨハネ 20章 19―23節の構成

① 第一段落（a）

ヨハネ 20章 19―23節は五つの小段落から成り立っている。最初の a では、イエスの到来が語られる。この小段落の最初の三行は状況を表す句である。主語は「イエス」であり、動詞は「来た」である。三行にわたって重ねられた状況句では、まず「さて夕方になって、週の初めのその日」というように日付を述べ、続いて「いくつもの戸が閉じられて」というように家の様子を述べ、最後に「そこには弟子たちがユダヤ人への恐れのために」と述べて、弟子たちの状態を描き出している。「日付↓家の状況↓弟子たちの恐れ」と筆を進め、最後に動詞「来た」を前に置き、その後に主語「イエスは」を配置している。このような一連の記述は、明らかに「イエスが来た」という事実を強調し、そこに読者の注意を集中させようとしている。そのイエスが、弟子たちの真ん中に立つ。

② 第二段落（b）

続く b では、イエスの言葉と動作が描かれる。「平和があなたがたに」という挨拶はユダヤ人の間では、「こんにちは」とか「さようなら」と同じように、ごく普通の挨拶として用いられるのは確かである。しかし、イエスのこの言葉は日常の挨拶を超えた意味を持っていると思われる。イエスはこの言葉を述べてから、「両手とわき腹」を弟子たちに示す。そこには釘跡と刺傷があるはずである。それらの傷は、弟子たちの真ん中に立つ方が幽霊でも幻想でもなく、十字架に上られた「あの方」であることを示している。

③ 第三段落（c）

c では、それを見た弟子たちの反応が書かれる。共観福音書では、よみがえったイエスに出会った弟子は、喜ぶよりも前に、驚いたり、疑ったりしているが、ヨハネ福音書では単純に「喜んだ」とだけ述べられている。この喜びが使命を積極的に受け入れさせる基盤となる。

④ 第四段落（d）

d では b と同様に、イエスの言葉と動作を述べている。イエスは再び「平和があなたがたに」と繰り返す。これが単純な挨拶であれば、二度も繰り返すはしないはずである。イエスの挨拶は儀礼で終わるのではなく、実質的な意味を持っている。告別説教で語られたイエスの約束の成就としての「平和」を弟子たちにもたらす。弟子たちを神からの平和で満たした後で、イエスは彼らに使命を与える。その使命はイエス自身が神から託された使命であり、弟子たちはその使命に参与する者となる。イエスは神の心を啓示するために遣わされたが、その同じ使命に弟子たちも加わることになるのである。それを語り終えると、イエスは彼らに息を吹きかける。彼らが使命を担い、それを遂行することができるようにと、彼らを新たにし、変えるためである。

⑤ 第五段落（e）

最後の e では、イエスの吹きかけた息が聖霊であり、それによって弟子がどのような権能を与えられたのかが述べられている。23節1行目の「ある人たちの」は、動詞を飛び越して、行末の「罪を」にかかっている。どんな人の罪であれ、弟子たちが手放す（赦す）なら、その罪は不問に付される。しかし、赦さずに憎しみを保ち続けるなら、それはそのまま残ってしまう。弟子たちは罪を赦すことができるようにと霊を受けた。その力を用いずに、憎しみをそのまま残すのは愚かなことである。23節後半のイエスの言葉は、罪を赦すようにとの勧めである。

f 以上のような構成に注目すると、イエスの言葉と動作を述べる b と d が対応しているのは明らかである。ユダヤ人たちが恐れていた弟子たちは（a）、イエスの言葉と動作によって（b）恐れから解放され、喜びに満たされる（c）。喜びに包まれた弟子たちに、再びイエスは語りかけ、息を吹きかける（d）。こうして罪を赦す力が与えられる。喜びと平和を受けた者に、さらに霊が与えられ、赦すことのできる者に変えられる（e）。

③ 復活者イエスの顕現

a 弟子たちはユダヤ人を恐れて、「戸」を閉ざしている。ここでの「戸」は複数形で書かれているから、いくつもの戸が閉じられていたことになる。この戸は家の戸であると同時に、彼らの心の「戸」でもある。いくつもの戸を閉じていたのは、その恐れのためだったのだろう。しかし、イエスは戸に鍵がかけられていても、家の中に入り、弟子たちの真ん中に立つ。八日後、トマスにイエスが顕現する時も、「戸が閉じられて」いる。しかし、そこには戸を閉じていた理由は何も述べられていない。戸が閉じられていたと述べるのは、イエスが肉体の命を取り戻したのではなく、復活のいのちへとよみがえったことを知らせるためかもしれない。

b 恐れが弟子たちの心を閉ざしていたが、その彼らのただ中に「来た」イエスは「平和があなたがたに」と挨拶する。ユダヤ人の間では、「シャローム（平和）」は「こんにちば」とか、「さようなら」という意味で、ごく普通の挨拶である。この「平和があなたがたに」はそのような挨拶の意味にもなる。しかし、イエスは両手とわき腹を示し、もう一度「平和があなたがたに」と述べて（21節）、彼らに息を吹きかけている。挨拶と行動のこの繰り返しは、単純な反復ではない。イエスは単なる挨拶としてではなく、それ以上の意味を込めて、弟子に「平和が」と語りかける。

c 一度目の挨拶の後で、弟子は恐れから解放され、喜びに満たされている（20b節）。ここでの「平和があなたがたに」は日常の平凡な挨拶を超えた特別な意味を持っているはずである。これは14

章の告別説教でイエスが約束していた「平和」の成就と考えられる。イエスは「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」（二四27）と約束した。イエスが約束していた「平和」が今、現実のものとして弟子たちに与えられたことを、この挨拶は示している。イエスの挨拶は日常の礼儀の領域に留まらずに、恐れを喜びに変える「平和」をもたらす。

④ 「平和（エイレーネー）」

⑦ギリシア語としては、「戦争や争いのない状態」を意味する。転義して、「一致・調和」、また、「秩序ある状態」としての平和を意味する。

①ヘブライ語のシャロームの意味に応じて、「安心・無事・平安」を意味する。「平和のうちに生きなさい」は別れの挨拶である。イエスがよみがえらせた会堂長の娘や（マコ五34）、罪を赦した女への帰還命令に使われる（ルカ七50）。

⑨「平和があなたがたに」は、ユダヤ人にとっては日常的な挨拶であるが、新約聖書では儀礼的な挨拶を超え、神からの祝福を伝える手立てとなっている。そこで、「平和」は手紙の挨拶になる。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの平和」とあるように、この平和は神から来る賜物であり、イエス・キリストを通して人に与えられる。その場合、平和は単なる無事や平安ではなく、神がもたらす救いと同義であり、イエス・キリストを通して神から人に与えられる恵みの賜物を意味する。このような平和のとらえ方は、特にパウロに顕著である。

⑫ヨハネ福音書の平和は、イエスが弟子たちに約束していた平和である（二四27、一六33）。イエスが与えるこの平和のなかで、弟子たちはイエスと共に生きる。この平和に招き込まれた者は復活のいのちに生き始めている。

⑬この喜ぶ弟子たちに息が吹きかけられて、権能が付与されてゆく。従って、二度目の「平和があなたがたに」は使命と権能が授けられるための挨拶である。父に派遣されたイエスは、弟子たちをもこの派遣に参加させる。「息を吹きかける」という動詞は新約聖書ではここにしか用いられない。神が「土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」（創二7）ように、イエスは弟子に息を吹きかけ、復活のいのちに生きる者へと新たに創造する。神の息は物事を新たにし、人をまったく新たな存在に変える。

⑭イエスは「聖霊を受けなさい」と命じる。「霊」という語は、もともとは「息」を意味する。イエスに息を吹きかけられた弟子たちは、「霊」を受けたのである。それは果たすべき使命が与えられたしるしであり、その使命を完遂する力が与えられていることのしるしである。

⑮23節で「手放す」と訳した語は、「借金を）免ずる・放っておく・そのままにする」という意味を持つている。「罪を放っておく」ということから、「赦す」という意味が出てくるのだろう。パウロが好んで使う「赦す（カリゾマイ）」は「恵み（カリス）」からの派生語である。「保持する」はここでは、「罪を捕まえておく」ことであり、「赦さない」の意味。罪を捕まえず、その手から放すとき、その代わりに人は他者をその手に得ることができ。そのような赦しをもたらすことができるのは、弟子たちがイエスから赦されているからである。

⑯イエスが吹きかけた息は弟子たちを造り変える「命の息」（創二7）であり、すべての人をその汚れから清め、神のものとす霊の息吹でもある（エゼ三六25―27）。イエスとの交わりは、イエスの死によって断たれることなく、復活によってさらに高められてゆく。